

NO. 15
September '93

newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

アジアへの関心と

女性学インスティテュート

小 玉 佐智子

本学が女性学インスティテュートを設置したのは、AWI (the Asian Women's Institute) に加盟することが直接の動機でした。AWIは、1978年にアジアのキリスト教九女子大学の学長会議で組織され、日本では当初、東京女子大学のみが参加されていましたが、83年夏に開かれた実行委員会において、日本からもう一大学の加盟を求めたいという話になったようで、東京女子大学の当時の隅谷学長から本学にお誘いをいただきました。ところがAWIは規約で「会員校は女性研究センターを設立し維持することとする」と定めているため、この加盟の呼びかけに応じるためには、まずその女性研究センターを設置しなければならないということになったのです。

AWIへの加盟もその要件としての女性研究センターの設置も、全く突然に外部から持ち込まれた提案で、その時まで私などはAWIという組織の存在すらも知りませんでしたから、正直なところ、当時はかなり躊躇する思いがありました。どの会議においてであったかは忘れましたが、研究センターの設置というような事業は、学内の研究者集団から内発的に提起・推進され、そして十分な計画と準備がなされた上で実現に至るのが本来ではないかという意味の発言をした記憶があります。また女性学インスティテュートの設置が決定されて、名称として「女性学インスティテュート」が候補になった時も、私は大学として「女性学」という学問の成立を認知するようで、賛成ではなかったのです。要するに、私は女性学インスティテュートの設置に消極的で協力しなかったものだから、今この原稿の依頼を受けて、いささか慙愧の思いがいたします。

確かに本学の女性学インスティテュートは天から降ってきたような形で誕生したため、委員の方は最近まで組織や運営に関する論議に多くの時間を割かねばならなかったし、インスティテュート室も急場しのぎに教授研究室の一室を充用したまま今日に至っています。また大学の設置するこの種の研究機関としては、学内外の研究者やAWI加盟大学の女性研究センターと共同研究を行うなど、研究の幅を広げるとともに質の向上を目指していかなければなりません。また本学では、女性学に関してはそれだけの力が蓄えられていないのが現状で、この

ままでは中途半端なものになる危険性がないとは言えません。

しかし、そのような問題を抱えながらも、女性学インスティテュートは、この8年余の間に、機関誌「女性学評論」やニュースレターの発行、講演会・シンポジウムの開催、1991年度AWI国際会議の会場校引き受けなど、エネルギーな活動を展開してきました。関係者の努力は高く評価されましょう。活動の対象領域も、狭義の女性学の領域にとどまらず、環境問題などにも及び、関心を寄せる学生も増えてきました。

とりわけ女性学インスティテュートを設置して有意義であったと思われるのは、私たちの間にアジアの社会やアジアの女性が直面している種々な問題、さらにはアジアの国々と日本の関係についての関心が高まったこと、私たちにとって啓発されるところが非常に大きかったことです。

1991年秋のAWI会議には、南はインド、パキスタン、西は遠くレバノンと、アジア各地の女子大学の代表者が参加され、シカゴからおいで下さったKCCのガチョック会長や本学の多数の教職員らとともに礼拝をまもり、環境問題を中心に討議をいたしました。茶褐色の肌の人、黄色の肌の人、白人のアジア人と、一言にアジア人といっても様々の異なる身体的特長をもった民族の集うなかで、私は私のアジアについてもっている知識はあまりに皮相的で、参加者が属しておられるそれぞれの社会や文化について殆んど何も理解していないことを思い知りました。もっとも、多様な歴史と文化をもつアジア諸国の実態を完全に理解することなどは不可能といえましようが、無関心であるのは恐いことです。現在の日本の女性の豊かで贅沢な暮らしは、アジアの人々の低賃金労働や環境破壊の上に成り立っているのですから、豊かな者の方が勉強してその改善の努力をする義務があると私は思うのです。

インスティテュートでは、しばしばアジア各地で奉仕や留学の体験をされた卒業生や学生のレポートをニュースレターに掲載したり、講演会を開催していますが、いづれも女性の視点に立った、しかもしっかりした洞察に基づくもので、私は大変勉強になりました。

このような意味において、女性学インスティテュートの設立は、本学の教育の営みに一つの画期的意義をもたらしたとって過言ではないでありましよう。いっそうの充実発展を心から祈っています。

(学長、総合文化学科教授)

カンボジアでの選挙活動と女性のボランティア参加

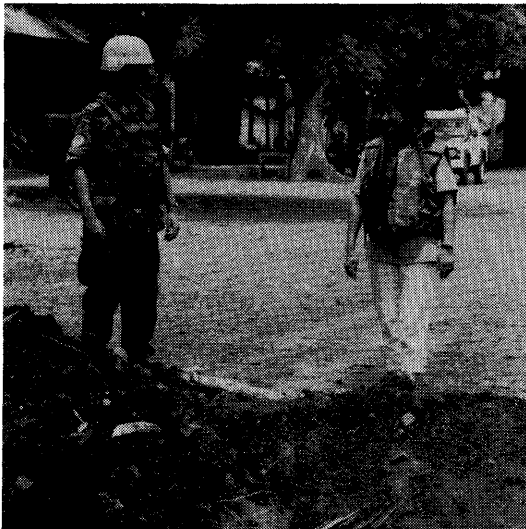
米川 正子

私は、昨年5月から今年の6月まで、カンボジアにおいて、UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）の国連ボランティア・選挙監視員として働いた。同僚の中田厚仁さん、続いて私と同じ州で働いていた文民警察の高田晴行さんの殺害事件等、すさまじい出来事がいろいろとあり、両国で大混乱を招いた。

選挙後、日本に帰国し、我々の活動ぶりを報道で聞いた人たちは「大変だったね」とねぎらいの言葉をかけてくれたのだが、中には「男の人ならともかく、女の人なのにそんなところへ行くなんて…」と口にする人もいた。危険な地域だから女性には不向きと考えているのだろう。でも、果たしてそうなのか。現地での経験に基づいて、女性のボランティア活動について考えてみたいと思う。

まず一口に選挙監視員といっても、単に選挙の監視をしていただけではない。選挙前に各国の政府から派遣された選挙監視要員はInternational Polling Station Officer（投票所での国際要員）という肩書きをもち、名の通り、投票作業のみを監視したことになるのだが、我々は国連ボランティア計画から派遣され（注：ボランティアというのは「無給奉仕」ではなく、「自分の意志で積極的に行動する」という意味）、District Electoral Supervisor（DES、地区〈郡〉選挙監視員）という肩書きのもと、自分の担当の地区において選挙に関する準備を全てしたのである。

まずプノンペンで、クメール語研修を受け、あいさつ



選挙妨害の攻撃に備えて投票所内に据えられた塹壕をチェックしているところ。著者は防弾チョッキを2枚重ね着している。左はオランダ軍人。

言葉や「投票」「民主主義」といった選挙の専門用語を勉強した。地方への派遣後、通訳などの現地スタッフの採用、各村における有権者数の調査、民主主義の基礎から教える選挙教育活動、有権者登録、選挙の啓発、各政党との会合、そして投票所の設置などと地区内を駆け回った。選挙部門の部長は「DESは先生、ボコボコの道路のドライバー、広報官、給料支払係、運送業者（物資の運搬、又、創価学会が寄附した中古ラジオを村人に配布した）、人事担当（投票所スタッフの採用の際、約600人面接した）でもあった」と言っていたが、まさにその通りだと思う。ボランティアというと、「職員のようにプロではなく、補佐的な仕事のみする」というイメージを抱きがちだが、我々はこのように、UNTAC要員の中で最も現地の者と密接に接触し、様々な役目を果たしていたわけである。

確かに、飲料水や発電機用のガソリン運びといった肉体労働が多い上に、ジャングルや地雷フィールドを通して村々へ行かなければならないこともあり、男性の方が有利に見えるかもしれないが、必ずしもそうではなかった。世界40カ国から来たDESの内、20%が女性であったが、男性よりたくましく生きていたのではないと思う。南アジアの男性の中には「地方にはポルポト派と地雷があって怖い」とプノンペン近郊に留まっていた人がおり、その一方「ポルポト派に会って説教がしたい。私についてくれれば大丈夫」とポルポト派支配地域へ、文民警察や軍人を誘導した女性もいる。日本人DES29人の内、女性は14人と、他国に比べて多数の女性をだしているのだが、男性は会う度にやせ細っていく人がほとんどで、女性は反対に体重が増えた人が多く、「病気をしたくても、健康すぎて」と嘆く人がいたほどだ。

その上、かえって女性だから出来たこともある。カンボジアに限らず、アジアにおいて女性の地位は低く、メイドやウエイトレス、又、UNTACが入ってからは売春婦、という職しかつくことのできない女性が多い。私は以前から「女性の開発」に興味をもち、女性の地位をあげるために、周りの意識をかえることが大事なのではないか、と積極的に女性のスタッフを採用し、村々での会合でも彼女らを表に立たせて、選挙の説明などをお願いした。男性の上司や村長しか見たことのない現地の者は、女性のスタッフや私が男性と対等に働いているのを見て、「女性でもこれだけのことができるのか」と感心し、びっくりしたと言う。私も「基本的に男女間の実力の差はない。女性を差別することは人権に反する」と現地の人々に言い続けてきた。

選挙をはじめ、我々のこういった行為がどれだけ現地の者に影響を与えたのかは、この時点で評価できないが、

長期的な目でゆっくり見てみたいと思う。これからも、相手が何を求め、同じ人間として自分には何ができるかといったボランティア活動を続け、そういった人が増えることを望みたい。

(E107、国連ボランティア・選挙監視員)

ネパールのたいこ

～ボランティアキャンプ体験記

三 島 亜紀子

タメルでたいこを買った。日本人の友人が持っているのを見て羨ましくなって買っただけだった。タメルは首都カトマンドゥにある安宿街で、様々な人種が行き交う繁雑だが魅力的な所だ。そのタメルの一角に楽器屋があった。この店の隣はハンバーグステーキ（特大）が三百円の外人向高級レストラン、前の道路にはゴミ捨て場があり、ゴミをあさっていた牛が野垂れ死んでいるという環境にある。

楽器屋のオヤジはプロだった。どんな形のたいこでも、彼の手にかかるとまるで生き物のように音楽をかなで始める。しかしプロの故に市価の3倍はする値段で買わされた。

エスニックのたいこだからと見くびってはならない。木製で形は筒状、左右は大きさが異なるので、高音と低音が出せ、叩き方とリズムでいろんな音楽が楽しめる。微妙な音を聞き分けてチューニングもする。もちろん、私のような初心者には音も満足に出すのは難しい代物だった。

前置きが長くなったが、私はボランティアキャンプなものに参加するためにはるばるネパールまでやって来たのであった。作業内容はヒマラヤが一望に眺められる山にある小さな村の小学校の施設整備。こう書くと立派だが、要するに壁ぬりだった。石で積み上げられた壁に、セメントをぬり込み、補強してゆく。そういった単純作業だった。

このボランティアキャンプには、訳あってあるグループに寄生する形で参加させていただいたのだが、ネパールの受け入れ側はそんな女の子ばかりの一行を温かく迎えてくれた。宿泊はその小学校の4つある部屋の一室を用い、もう一室は台所と化した。また、私達が作業をするという理由で学校は一週間の休校となった。そして近所に住む子ども達がセメントで泥遊びしている（風に見える）日本人を見に遊びに来る。そんな生活が始まった。「せっかくここまで来たんだから、一生懸命働かないと。」

始めは全員そう思っていた。しかしながら悪天候は続き、たび重なる雨のおかげで作業の中断を余儀なくされ、焦躁感はつのっていった。また、雨の合い間に作業をしても、私達には技術もなけりゃ力もない。結局はネパールの左官屋さんに頼る羽目となり、個人としての自分の無能力さを目の当たりにした。

しかしながら、そんなせわしない私達とは対照的に、左官屋さんは雨の降る間ゆっくりと雲を眺めながら煙草をふかしていた。

「ああ、これが世に言う“アジア・タイム”ってやつか。」そう思うと気は楽になり、私の心の中にも新しい時間の流れが生まれたような気がした。

休み時間や雨の間に私と友人は子ども達にたいこを習うことにした。ほとんどの村人はたいこを上手に操れ、



笑顔～小学校の前で

大人顔負けに演奏する子どももいる。たいこを習うには格好の環境で、子ども達も飽きもせずに私達の練習につき合ってくれた。

この子どもは些細なことでも最大限に楽しむことができる。すばらしいことだ。ある子どもの家を訪ねた時、その理由が解った。モノが少ないのだ。子どもの遊びは数多くあるだろうが、娯楽のためのモノといえば、たいこぐらいしかなかった。

「お父さんがこのたいこを買ってくれたんだ。」

子どもはどこからか、たいこを出してきて叩いた。そのたいこは非常に使い込まれていて、黒光りをしていた。虫食いの跡も見られた。皮も悪くなっていて、音も悪いが、子どもたちは代わり番こにそれを叩いた。その時、私のたいこは二千元もしないのだが、高級品のよう感じた。また実際、高級品であった。

私は一週間の間、たいこにあわせた数曲の歌を覚えた。子ども達からのすばらしいプレゼントだった。はたして私達の送った学校の壁は、私がもらったプレゼントよりもすばらしいものであったのだろうか。私には解らない。

ネパールから帰国して3ヶ月程になる。時間がたつにつれて、あれ程大事だったたいこが影を薄めてきた。ここでは娯楽はたいこだけではない。日々の多忙さの中で、埋もれていった。

ネパールのたいこを先にも買った友人の家にお邪魔した。友人のたいこも、大量のモノの中に沈んでいるかのようだった。

今度、暇になったらまた練習しようと思う。

(統合文化学科3回生)

「女たちよ、男たちよ」

山 祐 嗣

私は、自分を主張したり欲求をかなえたりするために虎ならぬさまざまなイを借りている。たとえば、論文などでは有名な研究者のイを借り(こんなのは可愛いほうだ)、人を非難したりするのに自分に都合のよい正義というイを借りる。また最近、私は女学院という地イを手に入れたが、これは結構魅惑的なイのようである。

そのくせ私は、半分は自己嫌悪だが、イを借りる人間はあまり好きではない。特に、配偶者のイを借りているだけの女性が好きにはなれないのである。結婚式のスピーチなどで、内助の功などという言葉を聞くとトリハダがたつ。女と男は、自立した関係を保つことが重要というわけで。

しかし、私のこの男女同権論はかなりのクセモノだ。それは、私自身の劣等コンプレックスによるものだからである。すなわち、女性にイを貸す男性を、指をくわえて眺めていた自分自身への慰めと、有職婦人たるわが配偶者に私はしかるべきイを貸していないという自責なのである。

それならば、イを借りる女性ではなく、イを貸している男性に直接反感を持たばよいのだが、それは私自身のコンプレックスが許してくれない。同性への嫉妬を自分の中で認めるほど私自身は成長していない。

実はこの劣等コンプレックスは、「男は女にイを貸すべき」という根強い前提のせいである。私自身の本質は、フェミニストというよりは女性蔑視者なのかもしれない。つまり、コンプレックスの合理化と女性蔑視に対する強烈な反動形成としての男女同権論のような気がする。さらに、私の中の男女同権論は、私自身のコンプレックスを刺激する行動をとる男性や女性を批判するための正義のイなのだ。この正義のイは、腕章とトランシーバーを持った愛校バザーの交通整理員に、ベンツのイによって横柄な態度をとるOGに対する私の怒りを正当化し、かつ慰めてくれる。

(人間科学科専任講師)

1993年度前期活動報告

アメリカ研究フォーラム 4月6日(火)

「アメリカ社会と女性の役割

～雇用賃金格差の変遷を中心に～」

アリス・ケスラ＝ハリス博士(ラトガース大学女性学研究所ディレクター、アメリカ学会会長)

座談会 6月11日(金)

「女性的男らしさ、男性的女らしさを求めて」

石浜みかる氏(かながわ住まい・まちづくり推進協議会常任研究員)〔大E82〕

(連絡先: 藤沢市鶴沼神明4-11-9-101 〒251)

講演会

第1回 6月22日(火)

「プロの女性——ネパール王国のをんなたち」

立石紀子氏(大阪大学医学部附属バイオメディカル教育研究センター所属、同学医学部学内講師)〔大H77〕

第2回 7月7日(水)

「カンボジアでの一年間の選挙活動をふりかえって～これからの国際貢献を考える～」

米川正子氏(国際ボランティア・選挙監視員)〔大E107〕

*座談会・講演会のテープは貸出できます。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っております。

◎開室時間 月～金 8:30～16:30

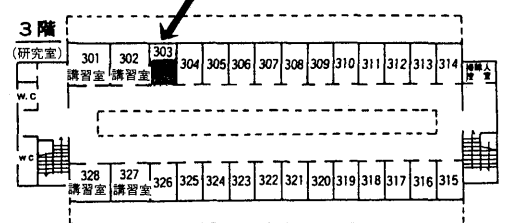
(但し、11:45～12:45は除く。)

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧下さい。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで。

女性学インスティテュート(303号室)



デフォレスト記念館(D館)

1993年度女性学インスティテュート編集委員

風呂本惇子、本城智子(委員長)、飯田正紀、井上紀子、上野輝将(ABC順)

編集・発行: 神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545